

平成 28 年度 第 58 回 関東地区教員研修会

期日 平成 28 年 11 月 12 日(土)

会場 森 村 学 園 初 等 部



日本私立小学校連合会

〒102 - 0073

東京都千代田区九段北 4 - 2 - 25

私学会館別館 6 階

電話 03 (3261) 2934

良く晴れた十一月十二日の土曜日、第五十八回関東地区私立小学校教員研修会が、横浜市にある森村学園初等部を会場に、静岡・神奈川・千葉・埼玉の各県から七〇六名の参加を得ておこなわれました。

会場の森村学園は、初等部以外に、幼稚園・中等部・高等部が設置されており、創立から一〇六年を迎える伝統ある学園です。創立者の森村市左衛門翁は、明治の実業家であり、日米貿易に先鞭をつけた立志伝中の人物ですが、教育の重要性を痛感し、いくつもの教育機関や学校に援助をしただけでなく、自邸の敷地に幼稚園・小学校を開きます。それが森村学園の始まりです。彼の人生哲学であ

第58回 関東地区私立小学校教員研修会



三十六年前に東京の高輪から現在地に移転し、広大な敷地に充実した施設が整えられています。今回の研修

関東地区教員研修会を終えて

関東地区私立小学校連合会

運営委員 吉 田 英 也

る「正直・親切・勤勉」は、そのまま校訓となっており、現在まで脈々とその教えは受け継がれています。

は、幼稚園、中等部等の施設も使っておこなわれました。

開会式の前に全学年十四クラスでの授業公開があり、森村学園の授業を参観する機会が設けられました。参観された先生方には大いに参考になる内容であったと思われます。その後の開会式では、関東地区私立小学校連合会会長である桐光学園小学校の斎藤滋校長、日本私立小学校連合会の重永睦夫常任理事、神奈川県民局次世代育成部私学振興課課長の秋山昌弘氏よりご挨拶をいただきました。その中で重永先生は、昭和十五年に私立小学校がすべて廃校にされようとした歴史を紹介され、私立学校を守ってきた先輩諸兄の努力を心に留め置くよう話されました。さらに、会場校の小栗透校長から歓迎のご挨拶がありました。

この後、脳科学者で(株)日立製作所フェローの小泉英明氏に「脳科学の視点から見た小学校教育」という演題で講演をしていただきました。先生は、科学者であるだけでなく、教育にも深く関わられ、国内のみならずアメリカ・フランス・中国などでも活躍されている方です。進化の過程の話や様々な実験でわかってきた脳内の認知の仕方など専門的

な話を分かり易い事例で話され、意識下を育むことの重要性へと話は展開しました。そのためには、幼児期の芸術や体育の体験が重要であるということだそうです。また、PISAの結果の中で十五歳における科学への意欲が、日本は最低水準であることに危機感を持たれており、意欲を育てることに言及されました。脳科学の面からみて、最初の体験が重要であること、意識下を育てることが大事であることを強調される講演でした。

昼食後、各部会に分かれ、それぞれに研修をおこないました。専門家の講演や師範授業、研究発表、ワークショップ、外へ出での実技など多彩な内容でした。ここで学んだ知見を学校に持ち帰り、授業や学級活動に活かそうという先生方の熱意に溢れた研修でした。

会場校の森村学園初等部の小栗透校長先生をはじめ、教職員、関係者の皆様にはよく準備・運営していただきました。感謝申し上げます。

国語部会

示範授業

「あめだま」

立石 言 (関東学院)

講演「物語教材指導の系統性」

授業者及び講師

筑波大附属小学校

青山 由紀先生

国語部会では、日私小連全国教員夏季研修会に続いて筑波大附属小学校の青山由紀先生をお招きして研修を行った。

物語を学ぶ上で大切なことは、時、場所、人物像など設定をよく読み取ることである。怖そうなイメージのさむらいが、実はやさしいさむらいであったことが分かった。これは、作者のしかけであり、母親の視点に沿って読んだ結果であることを学んで授業を終えた。

「いつ、どこ」「だれ、どんな人物」なかを読み取ることが中学年の中心。こんな行動をするさむらいはこんな人物にちが

いないと読む。

五年生ではおこりんぼうのさむらいというしかけを読むことが大切。お母さんの視点で読んでいたことに子どもたちは気付いていたが、本当にいばつたさむらいならこうはしない。これらが伏線になっている。五年生ならあと三つは伏線を読み取ることができる。「いねむり」「こつくりこつくり」「ぱっちり眼をあけて」はよく読むとおかしい。さむらいに使われている言葉がかわいらしい。



細かい表現に気づかせたい。

六年生でも差し込みで視点人物を教えるのに有効。地の文にだれの気持ちか書かれているのかを考えるのに適し、構造も学べる。

四年生になると「大事な物」も出てくる。「白い帽子」では「夏みかん」。かなりくわしい叙述で説明されている。「あたたかいつて何を意味しているの?」と聞くと、松井さんの気持ちじゃないかと読み取りがふくらんでくる。「一つの花」の「コスモスの花」も同じ。くわしい叙述には意味があることを知っていると、コスモスの花の象徴を考えることができる。これらの物語は「象徴型の題名」といえる。「象徴型の題名」は高学年でたくさん出てくる。「わらぐつの中の神様」を何に言い換えられるかを考えることで作品の主題に近づける。題名の意味をどうとらえたかを説明できるようにする。

低学年は叙述や表現に即しイメージ化することが大切。

「スイミー」で紙芝居づくりをする子ども達がつてくる。紙芝居をつくるためには「いつ、だれ、どこ」が必要だと気がついていく。あらずじを読み取るための要素を自分で注意して読んでいくようにしかけ

ていく。子どもの主体性と、つけたい力をかね合わせて言語活動をしくんでいくことが大切。

「お手紙」で一番大きく変わったのはだれかを聞く。がまぐんとかえるくんのどちらか。がまぐんとかえるくんのしあわせな気持ちは同じなのか?その幸せの自身は何なのか。急に聞かれてもなかなか答えることができない。そこでストップというまで二人組で話し続けさせる。考えはあるが、話す力のない子が話せるようにする手立てである。

隣同士で話をすることでまとまってくる。もやもやしているところを整理することで語彙が耕される。中学年で人物像を読み取っていくための語彙をふやしていきたい。

社会科部会

講演「こんな教材でこんな授業が! (教材論&授業論)」

坂戸 宏太 (慶應義塾横浜初等部)

社会の部会別研修は、元自由の森学園校長で現在はフリースクール

「ジャパン・フレネ」を設立・代表を務められている木幡寛先生をお招きして、研究授業と講演を行いました。

研究授業は、「森永マンナ」の授業」と題して、森村学園初等部六年菊組を対象に実施しました。参加した教員に対して提示された事前情報は、題名のみでした。教員陣は、懐かしのお菓子に思いを馳せる先生も



いれば、どこの女の子?という見当すらつかない世代の先生まで様々な思いで臨みました。もともと児童たちは題名すら与えられず、彼らが自ら、「これは〇〇ですか?」という問いを重ねることによって、題材を当てることから始まりました。やがて、題材がかつて一世を風靡したピスケットであることが明らかになると、児童たちの緊張も次第にほぐれていきました。授業の導入部分はもう少し続き、このビスケットが売れるようなキャッチコピーを出し合いました。案の中には、広告代理店を唸らせるような作品も飛び出し、教室は和やかなムードに包まれました。その後、かつて本当に使われていた広告が提示され、キャッチコピーを穴埋め形式で考えました。この広告は一九三八年に出回ったもので、戦争の足音が刻一刻と迫りつつある頃だということを児童たちが悟ると、この段階になつてようやく授業の本題を認識することとなりました。社会科では、新聞や雑誌を用いた授業は決して珍しくない

手法ですが、それらの「欄外」ともいえる広告を主体として、さらに帰納的に題材を描き出す木幡先生のテクニクは、児童たちのみならず、参加した教員にとっても新鮮に映りました。こうして熱のこもった授業は、七十分余りにも及びました。

講演は、先の研究授業とその周辺にかかわる質疑応答形式で進められました。授業の振り返りでは、児童たちの反応に即した柔軟な授業進行の尊重を強調されていました。少数教育かつ連続性のある授業展開が難しい現場に長く携わってこられた木幡先生だけに、この言葉は説得力のあるものとして参加者は受けとめました。木幡先生が授業中に見せた、児童たちと一緒に考えようという姿勢は、時間と手間を惜しまずに教材を発掘したからこそ表出するものでした。このような意気込みを、児童たちもまた敏感に察知していたであろうことと思います。質疑は、授業内容にとどまらず、我々教員たちが普段は目の当たりにする機会が極めて限られているフリースクールの現況にも及び、教科の枠組みを超えた講演の場となりました。

算数部会

子どもが数学的な思考を楽しみ、主体的に学び・協働的に学ぶ算数の授業づくり

長谷川誠子（聖ステパノ学園）

算数部会は、筑波大学付属小学校の大野桂先生を講師にお招きし、授業の実践と講演をしていただきました。大野先生は、子どもの学力差に左右されることなく、子ども全員が授業に参加でき、算数を学ぶことができる「ビルドアップ型算数授業」を提案されています。

今回は先生に、森村学園初等部三年生の児童に「かけ算のきまり」の単元から実際に授業をしていただきました。この授業は、自分たちが選んだ数字が、いつでも9の倍数になるという不思議さに自ら気づき、そこからその根拠を主体的に追及していくものでした。

授業は「先生との相性を調べよう」という問いかけから始められ、相性を調べるために以下のような課題が出されました。

①：好きな二桁の数字を頭に思い浮かべる
②：①の数字から①の一の位の数字を引く
③：②から①の十の位の数字を引く
④：相性診断表で③の数の横に書かれたマークを選ぶ

①から④までの活動を終えた子どもを順番に指名し、先生が次々にその子のマークを的中させていきました。教師がマジシャンのように見事的中させることで、子どもの興味を引き出し、やり取りの中で、計算した数があることに気付かせました。

そこから、計算の手順をブロックで再現させながら、さらに根拠を探り、操作活動を式に置き換えさせることで、かけ算の性質を説明させました。

ただ形式を教えるのではなく、きまりを自分たちで見つけ出していくという授業は、子どもたちが本心に夢中になれるもので、しっかりとした力を付けられるものだと感じました。これからの私達の授業の進め方について考

えさせられるものでした。

講演では、「ビルドアップ型の授業」を、登山に例えて分かりやすくお話下さいました。一つは繰り上がり、のたし算の文章題の例です。ただ単に「計算の仕方を考えましょう」と子供たちに出題しても、それぞれの考え方で進められ、どうしてよいか分からない子も出てきます。そこで、10個入りの卵パックや図などを



用意し、そこから球をどう移動させ、10のまとまりを作るかという「思考のスタートライン」を揃えます。これが登山口となります。スタートラインが揃うと、それぞれが実際に操作し、自力解決をしていきます。この自力解決が大切です。

その後、それぞれの考えを出し合い、どうしてそう考えたのかなど、みんなで問題解決に取り組んでいきます。

クラスの中でまだ理解できていない子供がいる場合は、教師がわざと間違えた事を言ったりして、その子が授業に参加し、考えられる場面を作っていくことも大事です。この様な取り組みが、みんなで一緒に山に登ることに繋がります。

算数の授業では、発見する力や想像する力を育てることも大切で、「ビルドアップ型」はそういう力も伸ばす事が出来る授業でした。

今回の研修を通して、教師の授業づくりの重要性和子どもたちが数学的な思考を楽しみ、学ぶことの大切さを実感させられました。

理科部会

講演「3Dプリンターを活用した学習について」

深沢 理恵（カリタス）

今回の研修会の主な内容は、3Dプリンターの機能と実践例・基本操作を学ぶ・実践演習の二本柱でありました。午前に森村学園初等部五年生の『流れる水のはたらき』で3Dプリンターを活用した授業を参観させていただき、午後は『3Dプリンターを活用した学習について』というテーマで学びを深めました。

3Dプリンターの機能と実践例としては、午前に授業をされた森村学園初等部森下清敬教諭から授業の自評をうかがい、その中で3Dプリンターを授業に取り入れることの利点について教えてもらいました。学校周辺の地形を再現し、実際に水を流すことで、いつも校庭の同じ場所に水がたまっていることに関連づけて考えることができたり、低いところにたまる層があることに子どもたちが気付くことができたりと、より具

体的かつ次に繋がる学習を展開することができたという話を聞かせていただきました。元々は六年生の地層の学習での導入を考えていたということでしたが、五年生の『流れる水のはたらき』の単元において地形を3Dで学習した経験はきつと次年度の学習にも深みを持たせてくれるだろうと思える実践でした。

次に、参加した先生たちが実際に『XYZmaker』というソフ



トを操作し、デザインしたものを3Dプリンターで作製するための方法を学びました。講師の先生の指導のもと、図形の置き方・画面の見方・図形の拡大回転の方法など様々な効果の操作方法を体験しました。ここで学んだ操作方法を用いて、一人ひとつ長方形のネームプレートを作るという課題には、皆楽しみなながらも真剣に取り組みました。ここで初めて3Dプリンターの実物に初めて触れるという人も少なくなく、ネームプレートができあがっていく様子を興味深く見守りました。

最後の実践演習では、自由課題としてこの日に学んだ技術を使って作品作りに取り組みました。教材として使えるものから趣味作品まで、作るものは自由ではありますが、各々が自分の作品の作り方や作品のコンセプト、作ったときの工夫や授業での活用方法のアイデアなどを説明するようにと言われ、それぞれ趣向を凝らした作品が多数できあがりました。

まだまだ3Dプリンターの普及には時間がかかると

思われますが、『XYZ maker』というソフトでは、これまで難しいと思われていた複雑な形をした立体の作図も簡単にできるため、活用の幅は広いように感じました。また、今回の自由課題のように好きなものを楽しみながら作る過程で子供たちが立体の感覚を養っていきける、そんなツールとしての利用も可能ではないかと思われます。

今後の実践に役立つ内容が豊富で有意義な研修会となりました。

生活・総合部会

阿波踊りチャレンジ

—低学年の民舞の取り組み—

秋本 篤志（鎌倉女子大学初等部

生活・総合部会では、森村学園初等部の早船先生による総合学習の取り組みとして「阿波踊りチャレンジ」の実践発表がありました。総合学習や運動会などの学校行事の中で、民舞を取り入れている学校は多くあります。「よさこい」や「ソーラン」などを行うことによって、学校のア

ピールにつながることもできません。また、民舞には、クラス・学年の団結、地域交流、異文化交流などの教育的な効果を期待することもできます。

森村学園の平成二十七年年度の阿波踊りの実践は、学校全体で取り組むこと、教師の思いを大切にしていくこと、本物の阿波踊り連と連携していくことで成功につながっていく

ということを教えてくれました。また、総合のカリキュラムは年度初めに作られています。子どもたちの活動に応じて弾力的に修正を加えながら、よりよい方向に向けていくことができます。指導者との出会い、発表の場など、教員が引き出しを多く持つておくことが総合的な学習を行っていく上で大切なことのように感じられました。

後半は、阿波踊りの連としてご活躍されている「南梓連」の連長の若見幸太郎先生による講演を聞きました。

阿波踊りを子どもたちに指導する際に、拍だけで指導すること、腰を落とした姿勢で踊ることに難しさを感じている方が多くいらっしゃいました。

阿波踊りは、二拍子の独特のステップで踊ります。最近の子どもたちは、地面に足の指がしっかりとつかない浮き指が多いと言われています。阿波踊りは裸足で地面をかみしめるように踊りますので、浮き指が治る効果もあります。本場の徳

島では、体育の授業で行っていることもあり、足腰が丈夫にもなります。また、阿波踊り体操というものもあり、爪先立ちで踊ることにより、ふくらはぎも鍛えられ、自然と身体が生き生きとする効果もあると言われています。

大和での阿波踊りの実践を通して、子どもたちに踊ることややりとげた達成感を味わわせることもできたとのことでした。阿波踊りの本場は徳島ですが、関東地方でも阿波踊りは高円寺などを始め多く行われています。

阿波踊りは見ているだけではなく、実際に踊る方が楽しいものです。阿波踊りをやっているところは、街中が一体となり行っているとのことでした。小学校でも阿波踊りを取り入れ、広めていくことをこれからも。

○太鼓・お囃子・踊り子の関係

お囃子・太鼓は小学生が実際に行うには難しいです。太鼓のリズムにのるということについては見た目だと難しそうに見えますが、やっていくうちに慣れていきます。阿波踊りは右手、右足が同時に前に出ていく特徴があり、最初はその動きにとまどうこともあるとのことでした。



最後に、阿波踊りの実演を見せていただき、参加者も実際に阿波踊りを体験させていただきました。

生活科・総合的な学習は学校の独自性を打ち出しやすい教科でもあります。カリキュラムを整備し、私立学校ならではの取り組みを打ち出してほしいと思います。

音楽部会

共通教材から合唱へ

坪野 紘子（桐光学園）

午前中の公開授業では、森村学園初等部の宮下路乃先生が「気持ちに合わせて歌おうーリズムに親しもう！」という題材で二年生の授業をしてくださいました。

導入は、「ハローハロー」「はじめまして」で子どもたちの緊張をほぐし、和やかで楽しい雰囲気の中から自然と音楽の授業に入っていきました。音楽会に近いということで、全校合唱として発表する「星つむぎの歌」を歌いました。これまでの授業で、内容的に難しい言葉の意味を一

つずつ読み解きながら進めてきたそうで、子どもたちは心を込めて表情豊かに歌っていました。音楽的に変化する箇所について子どもたちにも考えさせることで、歌詞や曲の雰囲気合ったよりよい表現をしたいという子どもたちの思いを深めていました。

後半は、手作り太鼓を使って「どろぼうがにげたぞ」のリズムパフォーマンズの練習を行いました。トマトピュレの缶に絵を描いた厚手のボール紙を側面に貼り、穴を開けてリボンを通すという簡単な手作り楽器です。こちらも音楽会で発表するので、太鼓を使う時の約束、細かい所作のチェック、掛け声を合わせるなどを中心に指導されました。立つ姿勢一つにおいても、実際に児童の前に立たせて見本を見せることで、子どもたちを引き付けていました。音楽会に向けて意識したい事柄が、普段の授業の中に散りばめられた授業であり、大変勉強になりました。

午後の研修では「共通教材から合唱へ」をテーマに、作曲家・指揮者・音楽舞台監督として多岐にわたって活躍されている富澤裕先生をお招きして講演とワークショップが行われ

しました。「合唱指導」というと難しく考えてしまいがちですが、日常生活の中でできることで、子どもたちを引き付ける手立てや、遊び感覚で音楽力をアップさせる方法など、すぐにでも実践できるアイデアをたくさん紹介していただきました。

今回扱った共通教材は「春が来た」「とんび」「もみじ」など誰でも知っている日本の伝統の歌ですが、一つの歌の中に、歌詞が伝えたい内容や高い声の出し方、強弱の表し方など、多くのポイントがあることに改めて気づかされました。また、その曲を使って腹式呼吸の仕組みや、友だちとのコミュニケーションから輪唱へのつながり、休符での気持ちの込め方など、様々な方法で合唱曲へと応用ができることも学びました。

後半は「COSMOS」「ピリブ」の二つの合唱曲を通して、先ほど学んだものの実践を余すことなくお話してくださいました。

富澤先生が授業を行う上で大切にしていることに「今やっていることに、全員が

集中できる環境を作ること」があるとおっしゃっていました。「楽しさ」とは、「集中する」こと。この二つは一体であり、楽しい授業の中には、必ず子どもたちが集中するポイントがあるということを、私たち自身もこの研修で身をもって感じました。富澤先生の巧みな話術やユーモ



ア溢れる語り口だけでなく、それを裏付ける教材研究の深さに大変感銘を受け、日々の授業の積み重ねの大切さを感じた実り多い研修となりました。

図工部会

図工の授業を見つめ直す

松原亜佐美（清泉）

図工部会では、様々な研究会等で授業実践を発表し、活躍されている筑波大学附属小学校教諭の北川智久先生をお迎えし、授業実践の数々をご紹介いただきながら、実際に体験をさせていただきました。

まずは「アナと雪の女王」でアナと王子が二人で手を合わせハートを作る場面がスクリーンに映され、「さあ、みんなでハートを作ってみましょう」から始まります。何人かのグループに分かれ、手や体、そして影でハートを作ったり、外に出て背景も工夫したりして様々なハートが出来上がります。そしてそれを iPad で撮影し iPhone に送信、ス

クリーンに映し出されます。皆、他のグループに刺激を受け、あれこれアイディアを出し合いながら作っていきます。そこで北川先生から、「皆で話し合った感じでしたよね。それこそが図工の良さなのです。」とお言葉です。研修始めにして、身を以てそのことを実感させられます。その後も「図工における話し合い活動」の実践例として『ビー玉ころがし』や『影絵』の授業風景を見せていただきます。そこには、子供達が iPad やアプリを自由に使いこなしている姿がありました。プロモーションやメイキングビデオを撮り iMovie で編集したり、画像に Sketch で文字や矢印など手書きで説明を加えたりしています。これらの活動により、コミュニケーションが活発になりヒントをもらったり、又教師の側もどこを誰が頑張ったかを把握できたりするそうです。「作品を残さなくても創り上げるまでの学びも輝きます」とのことです。

そして後半は二つのワークショップを行いました。まず一つ目は、共に



うことができるそうです。共同絵の具ひとつとっても、その与え方や扱わせ方によって子供達の活動をより活発に充実したものにできるので

す。そして二つ目は「クレイアニメ」作りです。まずは油粘土をのして人の型に切り取り、「ムーブマン」を作ります。そのムーブマンに動きを加え、stop motion studio を使ってクレイアニメを作ります。皆「えのぐじま」の作品を背景に利用したり、何人かで協力し合ったりして制作していました。

今回の研修を通して、様々な教材やアプリについて学べた事はもちろん、実際に自分達が子供達の立場になって活動してみることにより、多くの気づきをさせていただきました。先生方からは「いかに自分が作品主義だったか」といった反省の声や、「図工におけるコミュニケーションがどんなに大切か実感した」「途中経過の学びを充実させる工夫の仕方を考えたい」などの声も聞かれ、今後の授業に向けて、教師の視点のあり方を改めて考えさせられた貴重なひと時となりました。

家庭科部会

サルベージ・パーティに

参加して

江島 理恵（森村学園初等部）

日本では年間約二八〇一万吨もの食品が廃棄され、そのうちまだ食べられるのに家庭で捨てられているものは約三一二万トンという現状がある（出典：農林水産省）。フードロスはゼロにはならないが、家庭から減らしていくことで、それだけ全体のフードロスは少なくなる。サルベージパーティとは、持て余している食材を持ち寄り、おいしく変身させて食材を救い出すという新しい食のパーティである。一人ひとりが楽しみながらサルベージパーティに参加することで社会貢献につながるとポジティブな気持ちで捉えることができる。

研修では、最初に参加者が持ち寄った食材について、購入の経緯や困った理由を聞き出した。そうすることで以後の買い物で不要なものを見つめなおすきっかけになる。そ

してシェフによる調理が始まった。シェフは奇抜なものを狙わずにだれでも作れそうなメニューにすることで食材の可能性を広げるよう心掛けているそうだ。このパーティの目的はアレンジレシピの習得ではなく、まかない料理のように余った食材を別の料理に変えていく、シェフのクリエイティブな頭の中をのぞき、発想のきっかけを知ることが目的だ。



三時間ほどの研修の中で吉田シェフは七品を調理した。例えば、うどん粉末スープのように固定化された商品でも原材料欄を見て、だしとして使用したり、発酵食品同士の豆腐とヨーグルトを合わせて白和え風サラダを作ったり、原料をあわせることで味が調えられていくなどのヒントを得ることができた。外国料理に使用する調味料は家庭でもて余してしまいがちなものである。今回はチリコンカンソースをデミグラスソースと合わせることでコクを出して、大豆と厚揚げにからめた一品を調理された。そんな使い慣れないものでも、製品表示を調べることで料理のアレンジの幅を広げることができるのだ。怖がらずに調理する力を楽しみながらつけていけるとフードロスを減らす第一につなが

る。実際にシェフの料理を全員で試食すると、思ってもいない味だったり、言われなければ材料がわからなかったりと新たな発見に溢れ、とても楽しく過ごすことができた。食品廃棄という重いテーマのように感じるが、サルベージというアプローチで子どもたちへ食品の大切さ

を訴え、考えさせるために効果的であると感じた。参加者の感想からは、

スクールランチを嫌がる子どもや食べ物を捨てることに抵抗を感じられない子どもに対する手立てとして期待できるという声があった。また、ハンガーバンケットに取り組んでいる学校では宗教の学習と併せて取り組んでみたいという感想があった。

今回の研修を通して、知ることのできた。食品のサルベージという考え方をまずは自身の生活で意識し、今後の指導の中でも活かしていきたいと感じた。

体育部会

一人ひとりが

活躍できるサッカー

高橋 健一（桐光学園）

体育部会は、森村学園初等部の慶田光彦教諭による研究授業を参観し、その後、検討会を実施した。

研究授業の主な活動内容は、パス&GOによるシュート練習とゲームである。練習は、パスからシュー

トまでの一連の動きを覚えるために、パスを出して止まるのではなく、もう一度動いてボールをもらう意識を高めるねらいがあった。ゲームは、男女別々のチームを編成し、女子のチームには、キーパーとして男子が一名参加するというルールで行なっていた。また、グリット線を利用し、シュートゾーンを設けたり、ゴールキックの際、相手チームがセンターラインまで一度戻ったりというようなルールの工夫があった。

検討会は、六つのグループに分かれて、研究授業の様子を参観して参考になった点、工夫が必要な点、または各校の取り組みなどについて意見交換を行ない、グループごとに一枚の模造紙にまとめた。その後、話し合った内容を発表し、部会全体で共通理解を深めた。

検討会で話題に上がった参考になった点、工夫が必要な点は以下の通りである。

【参考になった点】
○授業者の子どもに対する声かけ
○授業者が礼を重んじている



○目標の提示の仕方
○ルールの工夫
○子どもたちの技能が高い（ボール蹴りゲームではなく、サッカーのゲーム展開になっていた）
○ゲーム中に、ボールに密集していない
○サッカー特有の動きが、しっかりと組み込まれている
○得点係、審判、タイマー等の役割分担

【工夫が必要な点】

△授業者の説明がやや長い（丁寧なところはよい）
△準備体操が不足している
△練習とゲームのつながり
△シュートゾーンが広すぎる
△男子がキーパーをすることでゴール数が減ってしまう
△チームでの相談時間が必要
△マルチボールを導入したい
△審判を増員してもよい
△子どもたちの待機場所の工夫

学校保健部会

いま、求められる

～学校・家庭・地域のつながりをつくる～
養護教諭の備え

後藤 千絵（桐蔭学園）

防災教育普及協会事務局長を務められ、社会福祉士及びボランティアコーディネーターの宮崎賢哉氏を講師にお招きし「防災教育」の視点から、できる限り教職員の負担を軽減し、かつ効果的な備えにつながる考

え方などワークショップを交えながらご講演いただいた。

まず、六つの班に分かれ「自助・共助・公助」トランプゲームを行なった。種類も順番もバラバラなトランプを五つの班が「住民」役になり、制限時間内に正しい順番に揃える。一つの班は「行政職員」役で、自分はその一人でしたが、班ごとに過不足のカードがまちまちで、住民側からの要望に応える難しさと行政班の中でも連絡調整など連携が必要なことなど体験した。実際、災害発生時には行政機関（役場や警察・消防等）が機能しないことを考えると、自分の身は自分で、家族のことは家族で、学校のことは学校で備える意識をもつことが大事であると学ぶ。自助の基本は「三つのL」を守ることで①生命（Life）②生活（Livelihood）③人生（Lives）それぞれ守ること。例えば「いのち」は助かっても生活が苦しかったり、人生設計（将来への期待）ができないと、助かった「生命」に危険が及ぶこともあるとのこと。

特に災害時には学校施設が避難所になる場合が多く、その際のポイントとして①名簿作成②運営体制の確認③臨時開放④長期開放⑤物資管理

⑥ルール作り⑦情報共有⑧リーダーや構成員（住民代表・教職員・ボランティア等）の健康管理⑨避難者の健康管理などの備えが重要項目として挙げられ、その他に女性やLGBTなど災害時要配慮者への対応も必要とのこと。学校施設の安全点検チェック（動く・落ちる・倒れる・割れるものは無いか等）も普段から意識していく必要があり、また災害時の避難所での生活を守る「安



全衛生の三原則」として①トイレ②食事・水分③休憩・睡眠を挙げ、特にトイレの機能が停止してしまうと感染症の原因につながり、食事や睡眠が成り立たなくなるため早急な対応が不可欠であるとのこと。その中で養護教諭の役割の要点として①保健室備品の提供・使用②児童生徒の安否確認と健康観察③児童生徒の心のケア④衛生管理と感染症予防⑤避難所支援と他職種との連携⑥保健室の復元⑦教職員の健康管理が挙げられ、私たち養護教諭に関わる課題や教訓として、自分自身も被災する可能性があるので、感染症予防対策をはじめ必要とされる場面が多く、指示命令や心身の負担が大きい。養護教諭の役割と機能を明確にし、教職員含む関係者で情報共有して災害対応や避難所運営に対し連携体制を整えていくことが大事であるとのこと。

いざという時に何が出来るかは、その時の状況によりマニュアル通りにいかない場合でも、臨機応変に対応していかなければならないことを学び、普段から備えていこうと思いました。

学級経営部会

レジリエンス（立ち直る力・心の回復力）の育て方

高丘のぞみ（聖セシリア）

今回の研修では、四月に行われた神奈川県私立小学校半日研修会に引き続き、NPO法人いきはぐでビジネスコーチをされている吉田忍先生を講師にお招きし、グループワークを交えながらご講演頂いた。

「レジリエンス」とは、困難に直面してもダメージをくい止め、立ち直ることができる力のことである。具体的には、「精神的な回復力」「抵抗力」「復元力」「耐久力」などとも言われている。

レジリエンスが高い人の特徴については、楽観的、目標を強く持っている、向上心があるなどが挙げられた。また、レジリエンスが高い人の具体例としては、オリンピック選手などが挙げられる。



レジリエンスを構成する四つの要素は、「感情のコントロール」「自尊感情」「自己効力感」「楽観性」である。「感情のコントロール」を高めるためには、まず、感情に気づくことが大事である。学級経営の場では、子どもたちと一緒に笑うなど、感情を共有することが重要となってくる。感情を共有することで、その感情が正しいことが伝わる。そして、自分の感情を客観視し、感情に気づく

くことで、感情を変えることができる。

「自尊感情」とは、「自分は自分のままでいいんだ。あるがままでいいんだ。」と思うことである。「自尊感情」を高めるには「あなたは素晴らしい」ということを伝えることが必要である。つまり、存在その物を肯定することである。

「自己効力感」とは、「自分はできるんだ。」と思うことである。「自己効力感」を高めるには、できていることを伝えることが必要である。教師は、ついできていない点に目が行きがちではあるが、特別なことではなくとも、「当たり前に」できていることを褒めて伝えることが重要である。あなたには、できる力があるということ言葉を言葉にして伝える必要性がある。

また、自己決定力が大きければ大きいほど、「自尊感情」や「自己効力感」は大きくなる。つまり、学級経営の場では、クラスの子どもたちが物事を決める場を増やしていくことが重要となってくる。物事を進める際に、選択肢を用意して、どちらかを子どもたちが選ぶように導くことによって、子どもたちに決定力をつけさせ、主体的に関わることで

きる。

「楽観性」とは、困難や逆境にぶつかつた際に、それをポジティブにリフレームする力を持つことである。つまり、自分の考え方や概念を再構築することである。困難や逆境に直面した際に、それをチャンスと捉えるか、それとも、ネガティブに捉えるかは大きな違いである。どうリフレームするかによって、その先が決まってくる。

グループワークでは、レジリエンスを構成する四つの要素をクラスで育むための具体的な手立てを考え学びを深めた。

吉田先生には、事例を交えながら、お話頂き、実りの多い研修となった。

学校図書館部会

これからの時代に求められる
資質・能力を育む学校図書館

前川 貴宏（湘南学園）

学校図書館部会では、横浜国立大学名誉教授である高木展郎先生に「これからの時代に求められる資質・

能力を育む学校図書館」と題してご講演いただきました。高木先生は、次期学習指導要領の改訂にも関わられています。

昨今、スマートフォンの普及やAIの進化に見られるように社会が大きく変わりつつあります。これからの時代に活躍できる子どもたちを育てため、教育も変わっていくことが求められているでしょう。

そのため、次の学習指導要領へ向けて議論が行われています。そこでは、これまでの学校の中で完結するような学力ではなく、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むことを目指しているそうです。各教科の知識・技能（コンテンツ・ベースの学力）だけでなく、汎用的な思考力・判断力・表現力等（コンピテンシー・ベースの学力）をバランス良く育てていくことを大切にしています。

では、このような資質・能力を育むためには、どうすればよいのでしょうか。

そのためには各学校の特色を生かした適切な教育課程を編成し、実施しながら、絶えず評価、改善していくことが必要とのこ

とです。このことを「カリキュラム・マネジメント」といいます。学校に関わる全ての教職員が、日々の授業等について、教育課程全体の中での位置づけを考えながら、PDCAサイクルによって質の向上を図ることが求められます。

授業づくりでは、単元全体の学習の展開を見通すことがポイントのことでした。覚えさせることと考



時間だけでなく、単元のまとまりによってねらいの達成を目指すような学びをつくるのです。そして、主体的な学び手を育てるために、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指したいとのことです。

さて、高木先生は、国語を専門とされており、国語教育と学校図書館との関係についても今回お話しされました。人間は、AIと違って感性によって文を読むことができます。また、問いをつくることもできます。これからの国語教育では、どのような資質・能力を育てるのか、より自覚的になって単元を作っていくことが必要とのことでした。そのためにも問いを大切にしたいとのことです。

ただ、国語の授業と読書では問いが異なります。学校図書館には、読みの広がりや、想像的に読み取ることに對して期待しているとのことでした。

講演のうちに、質疑応答を行いました。学校図書館が、どのような役割を担っていくのか、どのような資質・能力を育むのか、考えるよい機会となりました。

次の学習指導要領では、各教科等において育成する資質・能力が、体

系化され、明確になるそうです。私学においても、コンピテンシー・ペー

スの学力の育成は課題です。関心を

もつ必要があるでしょう。

学校図書館は、どんな教科とも協力できる縁の下で力持ちです。司書

教諭や司書もチーム学校の一員として、これからの時代に求められる資

質・能力の育成のため、力を発揮して

いきましょう。

メディア教育部会

プログラミング教育を考える

横山 治樹（桐光学園）

ここ数年、メディア教育部では、様々なことが話題に上がります。タブレットの導入、ICT環境整備、タブレット利用方法など気になることが多くある中、今年はプログラミングの話題が上がってきた。それも、文科省が二〇一六年に小学校でのプログラミング教育の必修化の検討を明言したことが影響している。すでにいくつかの学校では研究と称して、実践が行われている。公立学校では

二〇二〇年の実施を視野に動き始めているのである。そんな中、質の高い教育活動の実践を目指す私立小学校が、この流れを無視することはできないと考えている。

中学校の技術科ではすでにプログラミング教育が実践されている中、その中学校と連携をとり、教材研究や指導計画を検討している株式会社アーテックにご協力いただき、今回の研修会の講師を派遣していただいた



た。今回の研修では、講師の方にプログラミング教育の必修化の話があった背景の講義や、実際に小学生対象に利用されているアーテックロボをお持ちいただき、プログラミングを組んでロボを動かすというワークショップを開いていただいた。この際に、プログラムを組んでロボに命令を送るために利用したのは、富士通製アロースのウィンドウズタブレットである。このタブレットはNTTドコモのLTE対応モデルで、午前中の公開授業で利用されていたものをお借りしたものである。

前半の話では、海外のプログラミング教育事情を伺うこともできた。海外では、低年齢からの取り組みが当たり前になってきている。二十〜三十年後に、大人となつて活躍するのは今の子どもたちである。その子どもたちがどのように活躍していくのか。今よりもっと人工知能が発達し、ロボット工学が発展しているであろうその時代を生きる今の子どもたちにとって、なくてはならない力だと言える。その子どもたちを育てる我々は、プログラミング教育について真剣に考えていく必要がある

外国語部会

小学生に英語音声学

麻生 靖代 (桐光学園)

研修では午前の部に開催校森村学園初等部四年生の公開授業が行わ

と感じた。

後半は、現在試験的に取り組まれている活動を経験した。LEDや赤外線センサー、モーターなどの電子部品を、基盤とつなげて制御できるようにし、タブレット端末から命令を転送し、実際に動かすという活動である。現在、私たちの生活の中で当たり前となっている信号機や衝突回避運転自動車のことを手元で学んで実践できることは、好奇心を強く刺激されるものだった。

これからの世界を生きる子どもたちに、どのような力を育みたいのか、どのような手立てが有効的であるのか。そのことを考えるよい機会となり、また同時に、童心に返って黙々と取り組むという貴重な機会となった。

れ、午後の部では森村学園初等部英語科の取り組みについての発表と神戸海星女子学院小学校・関西学院大学教育学部非常勤講師の松本洋子先生による講演が行われた。

森村学園初等部では英国の公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルからネイティブの指導者を英語授業に招いている。一、二年生では週に一回、三、六年生は週に二回の英語の授業が行われ、一、二、三年生では主にフォニックスを学習している。テキストを使用せずテーマ別学習を行っている。授業の約九割は英語で行われ、子ども達が英語に慣れていることを感じた。海外の小学校とも交流を行い、英語を実際に使って楽しんでいた。

講演ではまず神戸海星女子学院小学校の英語について、次に参加者全員での音声学の復習、最後に関西レシテーションコンテストの様子を見せていただいた。松本先生は小学校の英語教育で大切なことは音声学であると考え指導に当たられている。

一、二年生の英語は楽しむ、決して英語嫌いをつくらない。発声・発音矯正を目的とした発音体操を行い英語の音を正確に出せるように指導

する。一年生二期から文字指導に入る。そして後半からは自分の名前を書く学習になる。一年生六月に行われた日曜参観の映像では、英語授業十時間で *It's a small world* をいきいきと歌っていた。

次に三、四年生ではフォニックス指導が始まる。フォニックスでは徹底した英語音声のインプットを母音に重点を置きながら行っている。三学期には英語表現の一環として暗唱を行う。子ども達は三分間弱の絵本 *Gingerbread Man* のお話を文字を見ずに教員の語りだけで覚えていく。

五年生では文字指導は筆記体に移る。暗唱課題は二から三分ほどのものをする。高学年になつた子ども達は音声学の基礎を学習し始める。

六年生では音声学はさらに高度なものに進み、暗唱課題が二課される。オーストラリア留学生との交流は実際に英語を使う大切な機会となっている。

これら六年間の指導で大切にしていることは英語の音声を普段から徹底的に指導すること。指導者が正しく音を出し、児童の音を聞き分けて矯正する力を

つけることである。

音声学の中で日本人にとって難しく、しかし非常に大切な項目を松本スペシャルと名付けて授業で学習しており、研修会でも実際にイソップ物語の一部を使って項目別色分けを参加者全員で行った。

その後西日本私立小学校連合会外国語学部主催の小学生レシテーション



ンコンテストについてお話を伺った。出場者の資格は大変厳しく、そのレベルは大変に高いものであった。

今回の研修を通して教師が力をつけることの大切さと発音はネイティブ講師の方に来ていただければ大丈夫と考えていた甘さを痛感し、これからは私学の仲間とともに研鑽を重ねていきたいと思った。

学校劇部会

演劇表現・

即興的表現の教育力

河原 崇之（森村学園初等部）

学校劇部会では、講師として Art-Loving の小山博次氏と梶原航氏をお招きし、「教師における演劇表現と即興的表現の教育力を体験する」というテーマのもとに、ワークショップを行った。小山先生は午前中に行われた川窪章資先生の公開授業「創作劇に挑戦」について「今

日の午前の授業は、四十五分間のショーパフォーマンスを観ているよ

うだった。まさに、この授業こそ、教師における演劇表現であり、一つの即興劇なのだ。」と語られた。「伝えたい想いを言語化し、伝える表現力」を養うことが今回の研修最大のポイントである。演劇教育の意義として、小山先生は英語学習を例に挙げ、英語を話すことは手段であつて、目的ではないように、「自己を確立し、相手を尊重しながらも、行動の目的をきちんと理解し、物事を遂行していける自立した人間」

を育てることこそが演劇教育であると説かれた。即興劇とはシナリオのないドラマであり、その理論的な部分を先生の体験を交えて丁寧に説明してくださった。中でも『空気を読む』というのは日本固有の文化であり、失敗を恐れる文化であると言われていたことが印象的であった。今回のワークショップは参加者自身が子どもたちの気持ちを体験し、普段の声掛けや指導方法についても考える機会にもなった。

即興劇に向けた準備として視覚的、聴覚的集中力

を必要とするいくつかの課題を行った。視覚的な集中力の課題では、参加者が円になり、中央にある椅子に対して動作を「アクション行い、一人ずつ前の人の動作に新しい動作を付け加えていく。前の人の動作に関連付けて、次の人が動作を加えていくことで、参加者全員で一つの物語を紡ぐことができた。第六感を使う集中力の課題では目隠しをした状態で握手した相手を探し当てることを



行った。ほぼ全員の人が相手を探し出すことができ、視覚に頼らない感覚を実感できた。様々な課題が準備されており、即興劇に向けた集中力が鍛えられた。

グループに分かれ、選んだお題を一分間だけ相談し、発表する即興劇を行った。起きたことは否定しないで助け合うという助言をいただいた。どう展開するか自由な完全即興劇のスタイルであるという説明を受けた。「時計」「きらめき」など様々なお題を即興的に表現した。どのグループも一つとして同じ展開がなく、個性的な物語が出来上がった。課題を通して学んだ力が活かされ「即興劇なんて無理だ。」と思っていた人も含め、全ての人が物語に参加し、達成感を感じることができた。参加者の感想には、「ハードルが低いところから活動が組まれていたので、参加しやすかった。」とあった。体験を通し、子どもと同じ目線に立つことができるワークショップであった。

最後に小山先生より「アクティブラーニング、英語学習にも、表現力は必須である。よりよく生きていくために、表現力をつけるための活動が必要であることを広く理解してほ

教頭会 部会

しい。」という言葉を読んだ。

1 子どもの人生をまもるための フィルタリング活用法

2 情報交換

辻 望 (関東学院)

教頭会ではデジタル・アーツ株式会社、工藤陽介先生から、「ネット社会の危険……昨今の SNS トラブル事例と背景、対応」→子どもの人生をまもるためのフィルタリング活用方法」という演題でお話をうかがいました。先生はスマホに潜む危険について、疑似体験シナリオを通して具体的な事例を挙げながら説明してくださいました。出会い系サイトでの被害は減少しているもののコミュニケーションサイトでの被害は増加していること、「なりすまし」にも注意が必要、と話されました。また SNS へ不意な投稿から個人情報情報が漏れ出すこと、無料メッセージアプリでのいじめがあること、メッセージやアプリ、ゲームによるスマホ依存



があることなどについても触れられ、子どもには具体的な被害を挙げて説明すること、友だちも同じ問題意識を持っていることを伝えるよう話されました。

今子どもに必要なもの、と先生が考えるのが「情報モラル教育」でした。これは「フィルタリングに頼らなくてもネットのトラブルに対処

できるリテラシー（モラル・意識）を身につけさせる教育」をさすそうです。なかなかそのリテラシーが子どもたちに身につかない。そこでフィルタリングの出番となるといいます。ただフィルタリング（含む機能制限）の役割として「リテラシーが不十分な子どもの危険を回避させる」だけでなく、「使いたいサービスをブロックすること

で、そこに潜む危険について考えるきっかけを作る」ことでもあると、先生は指摘下さいました。

フィルタリングは初期設定では「危険性のあるサイト」も「有害サイト」もブロックしてしまえます。けれども「危険性のあるサイト」の中のものすべてに危険があるのではなく、そこには子どもが見るのに適当であったり、よいサービスであるものも含まれているといえます。そこで、子どもがリテラシーを身につけているかどうか問われます。もし子どもにリテラシーが身についてい

ば、子どもに必要なサイトは危険性のあるサイトの中にあっても保護者が許可をすることでフィルタリングを外し、見ることが可能となります。

スマホには「Wi-Fi」に効くフィルタリングを付けるように、とのおすめもありました。ネットワーク型フィルタリングの場合、スマホで「Wi-Fi」につなぐとフィルタリングを回避することが可能になります。スマホにはフィルタリング機能のついたブラウザを端末に入れる方式が有効だということです。

「子どもの人生をまもるためのフィルタリング活用法」という演題どおり、フィルタリングは活用するものであると考えます。まずは情報モラル教育を押し進めていく必要を感じます。その上でどう活用していくか。それは保護者や教員、そして子どもにも投げかけられています。

情報交換では行事の際の入場者の制限有無やチェックの方法、成績処理等の電子化、携帯電話所持許可の状況について等が話題となりました。

学校紹介

豊かな初等部生活を

森村学園初等部

校長 小 栗 透

森村学園初等部は、一九一〇年、現在の東京都港区高輪の森村邸の一角に開校した、南高輪尋常小学校がその始まりです。

学園創立者森村市左衛門は福沢諭吉から「国家の独立を保つ根本は、貿易を盛んにして国家を富ませることにある。」との話を聞き、貿易の仕事に一生をかけるようになり、

その中で、日本陶器（現ノリタケ）東洋陶器（現OTTO）日本碍子、等の企業を設立しました。その後、人材育成の重要性を認識し、教育事業への援助を始めました。各種の教育事業、福祉事業、教育団体、修養団体への援助を行った後、日本女子大附属幼稚園（豊明



幼稚園）の甲賀ふじ園長の「花をつくるのもよいが、人をつくるのが大切ではないでしょうか。」という言葉に心を動かされ、森村邸の一角に小さな幼稚園と小学校を開校しました。

初めての卒業生は、男子四名、女子四名の八名でしたが、三十七年前に港区高輪から現在の横浜市緑区へ移転し、それを機に、それまでの二クラス体制からし、三クラス体制へ移行し、一学年百二十名、全学七百二十名の初等部へと成長しました。

当時を物語るものは少なくなりましたが、今現在も、三階から二階へ降りる階段の踊り場に像の剥製が飾ってあります。この像の剥製は、大正末期、森村家がシンガポールにゴム園を持っている関係で、現地の

方よりプレゼントされたものです。この像の瞳は、それからずっと森村初等部の歴史を見つめ続けています。初等部の教職員は、学園創立者森村市左衛門の願い、「心の正しい、世の中の役に立つ人を育てる」を胸に、「正直・親切・勤勉」の校訓の元、教育活動に当たっています。

初等部の研究体制は、教育研究部を中心に年間計画を立て、進めています。年度当初に教員一人ひとりが年間研究テーマを設定し、授業の中でテーマに沿った活動を行い、年度末にその総括を行います。また、教員は一人年一回以上の授業公開を行います、参観した教員の助言や感想をもらいます。教育研究部が主催する校内授業研究会は、年二回開かれ、全教員が参観、その後の協議会に臨み研究を深めています。その他にも、教科部会（主として国語・算数）が主催する授業研究も学期に数回開かれ、教科を中心とした、研修活動を行っています。教員は、外部の研修会にも参加しながら、個々の教育力の向上に向けて努力しています。

初等部に学ぶ子ども達は、恵まれた自然環境の中で、学びに学校生活にと充実した毎日を送っています。最寄り駅の東急田園都市線「つく

し野」に七時三十五分に着く電車です。多くの児童が通学し、五十分過ぎには、校庭で遊ぶ元気な子ども達の声が響きます。

担任は、国語・算数・総合・道徳の授業を担当し、他の教科はすべて専科の教員が授業を担当します。英語は、ネイティブの教員が一年生から日本語をなるべく使わない授業を実施しています。また、行事や体験型学習にも力を入れ、運動会・音楽会・展覧会・学芸会は毎年、四年生以上は五泊六日の林間学校、五・六年生はスキー学校と、宿泊を伴う野外活動も重視しています。



平成 28 年度 第 61 回 全国 幹 部 研 修 会

期日 平成 28 年 12 月 1 日(木)～ 3 日(土)

会場 ホテル モントレ 仙台 他

十二月一日、「平成二十八年年度日本私立小学校連合会第六十一回全国幹部研修会」が、研修主題「未来を担う子どもたちのために」の育成をめ

(釜谷地区慰霊碑設立委員会代表)から「震災から学ぶ命の尊さ」と題し、津波により自然豊かな地域が一瞬にして跡形もなく消失した大川小学校と地域についてのお話をお聞きし、私たちも管理職として危機管理の在り方を改めて考えさせられました。終了後、日私小連事務局長清水良一様から私学に関する最近の状況についての報告会、そして記念撮影を行いました。夜の懇親会・情報交換会では、テーブルを囲み、胸襟を開いてそれぞれの学校経営等について情報を交換し合いました。会員相互の連携

に「ほっとした。見つかった」という思いがあった。しかし、互いに力を合わせて進んできた地域であつたのに、大川小解体か保存かという議論、そして大川小保護者二十三名による裁判が起こる中で、震災に対する見解の相違が鮮明になっていった。「津波が来る予測はついた」という考え方は、その時校庭に避難していた釜谷地区の住民の「大丈夫だ」とした判断も否定することにつながるのか、住民が留まり、犠牲となつたのは自己責任だという事に通じるのではない。津



- ①新しい学習指導要領の目指すもの
②言語活動と「言葉の力」
③「生きる力」ということの表層と基層

新しい学習指導要領の目指すもの

■この三月、次の学習指導要領が告示されます。まずはこれに関して、梶田先生が語られたことを私意により選択、列記します。

・学習指導要領は、日本の教育の方向性を示すものである。私立小学校は、その中核を担う立場にある。

・現在（当研修会時点）、最後のまとめの段階にあり、各教科の擦り合わせを行なっている。その中で、例えば英語の時数確保が課題になっている。

・学習指導要領は、あくまでも最低基準。自校の特色は何か。どうアピールするか。

私学ならではのことに取り組みたい。

・教育界では、アクティブ・ラーニングが頻繁に取り上げられている。しかし、安易に惑わされてはいけない。指導しなくてはならないことは徹底かつ継続して指導する。基本的な学習態度も同様である。

■何年先まで視野に入れるか。時代の風をどう読むか。判断を誤ると、それは私学にとって致命的になる。講演の中には、こうした警鐘的なことも含まれていました。

言語活動と「言葉の力」

■言語力、言語活動、言葉の力に関して、梶田先生は事あるごとに述べられています。

言語は、全ての学習に共通す

る基盤となるからです。講演資料の中には、言語活動の展開のステップ、具体的な教育活動例、読む・書くに関する第一水準から第三水準などの要点が分かりやすく示されていました。

いずれも実際に指導にあたる際、大いに参考にすべきことだと思います。

■「話し合い」や「学び合い」についても触れました。活動自体に満足していないか、というご指摘です。論理的な発言の有無と概念の浅深。これらを評価の観点とする検証が常に求められると感じました。

「生きる力」ということの表層と基層

■「我々の世界」を生きる力。「我々の世界」を生きる力。私的に換言すれば「集団と個」「社会と個」あるいは「世間と個」ということになるかもしれません。いずれにしましても梶田先生は、この二つの面によって「生きる力」を説かれました。言うまでもなく、どちらか片方に偏ったのでは、真の意味での「生きる力」にはなり得ません。

大切なのは、そのバランスであり



ましよう。

■この「生きる力」を問われているのは、むしろ指導者側の方ではないか。そうした感を抱きつつ記録を閉じることにします。

報告 武藤 浩之（桜の聖母学院）

2010 年代の教育宣言

今や、地球規模で激動する 2010 年代を迎えました。私たち私立小学校は、著しい社会変化と科学技術の高度化が進展する時代の中で、建学の精神を継承するとともに伝統を重んじ、その使命とする理想の教育をめざし、誇りをもって初等教育の先駆的な実践を世に問うてきました。

21 世紀は「知識基盤社会」の時代であるといわれています。その一方で「心」の時代でもあります。私たち私立小学校は、個人の自由と人権および児童一人一人の個性を尊び、その内なる可能性を児童愛をもって引き出す方法を実践・探究し、未来を切り拓いていく基礎的資質と心豊かな人間性を育成します。

併せて、真の世界平和と持続可能な自然環境の維持のために、広い視野をもって考え、共感する力を身につけた児童を育成します。

そのため、私たち私立小学校は、伝統と特色ある教育をさらに充実させ、私学人としての自覚に立ち、お互いに協力結束し磨き合い、わが国初等教育の新たな創造をめざすことをここに宣言します。

2010（平成 22）年 6 月 11 日

日本私立小学校連合会